

明善同窓会 関東支部 会報

発行：明善同窓会関東支部会報委員会
連絡先：meizen.dosokai.kanto@gmail.com
https://meizen.site



ご挨拶

関東支部会長 昭和51年卒 内田直人



明善同窓会関東支部の皆様、お元気にお過ごしでしょうか。コロナ感染も収束の兆し、行動制限が緩和され気持ちも明るくなってきました。昨年より支部会長を仰せつかり微力ではありますが関東支部の活動の中心となり盛り上げて参ります。ご支援・ご協力よろしくお願いいたします。

コロナ禍で恒例の支部総会は2020年は中止、21年はオンライン開催、22年は人数制限し小規模90名でリアル開催しました。そして今年は7月22日(土)に従来の形態と規模で開催いたします。ゲストとしてミュージカル俳優の中川絵理香さん(平成14年卒)を招き、昨年の平山トオル君同様素敵な歌とお話が披露されることと思います。ここ3年の行動制限で不自由な生活、リモートワークで対面交流が減った職場、おかげで懐かしの筑後弁での会話もめっきり減ったのではと推察します。ぜひ総会・懇親会へお越しいただき、筑後弁で旧交を温めていただければ幸いです。

さて、関東支部に限らず他支部、他校同窓会でも若い同窓生の同窓会の認知度や参加が少ないことが課題のように感じています。そのためには参加してみたい、参加してよかったと思われる同窓会活動にしなければなりません。その一環で現役学生や若い同窓生での交流を進めるべく支部学友会(学生の会)で交流会等イベント開催していま

す。その結果、現役学生も毎年の総会に参加してくれ年代を越えた交流ができています。これを引きつかけに若い方々のネットでの交流の広がりを通じて、同窓生の輪がさらに広がることを期待します。

昨年12月、明善2年生280名が修学旅行で上京した折、大学生含め先輩方18名との対話会を開催し、関東への進学、就職の魅力を語り、進路を決めるためのアドバイスをし、また熱心な質疑も行われました。帰校後寄せられた感想文には感謝の言葉だけでなく、先輩方の夢や希望に満ちた話を聞いてとても有意義な交流ができたこと綴られていました。もちろん関東支部の存在も認知され、数年後には多くの生徒が支部活動に加わってくれることを期待します。

地元久留米を離れても同級生、先輩・後輩との交流を通して、懐かしい地元や明善時代の思い出を語り合うことで旧交を温め続けられる同窓会になることを願います。関東支部の皆様のご協力、ご支援を頂きながら同窓会の活動を、ひいては母校の発展や卒業生の活躍を願いつつ、進めていきたいと思っています。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

ピンチをチャンスに変える

同窓会長 昭和50年卒 内村直尚



明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、同窓会の運営にご指導・ご鞭撻をいただいておりますこと、心よりお礼申し上げます。

第53回、54回と明善大同窓会が中止となりましたが、昨年の第55回は松田一成実行委員長のもと昭和61年卒が担当となり、今までと異なり久留米シティプラザで10月15日(土)に開催致しました。感染拡大予防のため式典だけを行い、懇親会はありませんでしたが、式典終了後、学年毎に場所を変えて、懇親会を開催され、久しぶりに同級生との友好を温めることができたようです。

現在、コロナをはじめ地球温暖化など複雑で多様な難題に直面し、私たちは自分一人あるいは一企業では解決できないことや人間の限界に気付いています。このような時代であればこそ、答えのみつからない状況に耐えられる能力、「ネガティブ・ケイパビリティ」を養うことが、人に寄り添い共感を育む力になり、人間力を高めます。今をピンチと思わず、人として成長できるチャンスに変えて下さい。互いに心を通わせ未来を信じ、一歩ずつ進むことが現状を乗り切る一策だと思います。それには心に余裕をもって他人へ接することが大事です。つらさや哀しみを体験すると人は強くなり寛容になります。コロナの時代は心の時代、今は少し立ち止まり準備する期間として、将来この苦勞が報われるよう活かされたいと思います。

そのような中、「ウイズコロナ時代」の母校における様々な活動を支援するため、今回、「コロナ対策支援金」を会員の皆様にお願ひしました。支援内容は、コロナウイルスに感染するリスクを減らし、今後も教育や部活動を継続発展できる活動や物品として、具体的な内容や使途については学校に一任という形式をとりました。関東支部を始め、会員の皆さまからの多くの支援金を頂き、誠にありがとうございます。今年の2月28日の明善同窓会入会式で山口校長先生に直接お渡ししましたところ、大変感謝しておられました。ところで、4月7日に開催された入学式では、新入生の皆さんに校訓の「克己・盡力・楽天」を心に刻み、充実した高校生活を送っていただく様に以下の内容を祝辞としてお伝えしました。

それは、卒業後、大学や職場で多くの人と出逢い人生を送る時に、人としての魅力、すなわち人間性が大きな成果や幸せにつながることで、その人間性を高めるには「心の偏差値を高める」ことが大切で、まずは明善高校での3年間でしっかりと心を磨き、自分を立派に成長させてほしい、と新入生の皆さんを激励いたしました。

今後同窓会会長として明善同窓会および明善高校の更なる発展に少しでも寄与出来るよう励んで参る所存です。至らない点多々あるうかと存じますが、会長を始め同窓会関東支部の役員の皆様、会員の皆様には引き続きご支援・ご協力をお願い申し上げますと共に、皆様の御多幸と御健勝をお祈り申し上げます。

ご挨拶

校長 山口隆嗣



明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、日頃から本校並びに本校生徒に對し、ご支援を賜り、誠にありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

さて、ご案内のとおり、令和4年度も、なかなか感染状況が収まらない状況ではありましたが、学校では「行事を含めた教育活動全般を、でき得る限り元に戻そう」と考え、取り組んでまいりました。時期によつては、規模の縮小等を余儀なくされたものもありましたが、全日制では文化発表会、大運動会、修学旅行等、定時制も生活体験発表会、文化祭、修学旅行と、ほとんどの学校行事を実施することができました。とりわけ大運動会は、ほぼ3年ぶりの本格実施であったため、1、2年生はもとより、リーダーを務める3年生までもが初めての経験となり不安もありましたが、先輩方が残してくださった資料やビデオを頼りに、生徒たちは見事にやり遂げてくれました。明善生の「底力」を見せてもらおうことができ、私たち職

員も幸せな時間でした。

また、全日制の修学旅行(2年生)は東北・東京を目的地として実施しましたが、東京に入った3日目の夜には、関東支部の同窓生の有志の方々から、生徒たちに貴重なお話をしていただく機会を設けることができました。生徒たちは、先輩の話を聞き逃すまいと耳を傾けておりましたし、事後の感想を見ましても、刺激を受けた生徒が数多くいたようで、本当に感謝の念に堪えません。学年団の意向を快く引き受けていただいた内田会長をはじめ、土曜の夜であるにもかかわらず、生徒たちのために駆けつけてくださった皆様、本当にありがとうございました。

今年度も部活動において、いくつもの部がめざましい成績を残してくれました。オーケストラ部、化学部、文芸部が全国高校総文祭に出場し、化学部は全国2位に相当する優秀賞を受賞しました。

これに加えて、弁論部、生物部、放送部も九州高校総文祭に出場。運動部におきましては、野球部が夏の大会で、実に42年ぶりとなる県大会出場を果たし、優勝した九州国際大学附属高校相手に善戦してくれました。また、陸上競技部も全九州新人大大会に出場しております。その他にも多くの部活動が県大会に進出するなど、よく頑張ってくれています。

また、進学実績についてですが、この原稿を書いている時点では、国公立大学の結果がまだ判明していないため、具体的な数字をお伝えすることができません。あしからずご了承下さい。ただ、これまでの模擬試験の結果、大学入学共通テスト本番の結果等から推測して、例年並みの結果を収めてくれるのではないかと考えておるところです。

現在、学校の方では、卒業式まで一週間を切り、少々、慌ただしくなっております。今年の全日制の卒業生は前代未聞の「入学式ができなかった」学年です。また、全日制、定時制ともに、この3年間にわたって、「コロナ禍」に翻弄された学年でもあります。そのような現実を前に、弱音

も吐かず、投げやりにもならず、真摯に学校生活を送ってくれました。卒業式ではあたたかく送り出してあげたいと思っています。また、彼らの中からも、少なからず関東の大学等に進む者が出てくると思いますので、その折はよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今後とも、母校、明善高等学校に対し、ますますのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

第56回明善大同窓会のご案内

実行委員長 昭和62年卒 緒方麻美

○日時 10月7日(土)

14時開始(13時受付開始)

○場所

ホテルマリタール創世

○テーマ

「世界も、時代も、変わっても、
あい変わらずの、友がいる。」

再開!第56回明善大同窓会

明善同窓会関東支部



の皆様、いかがお過ごしでしょうか。世界中で急拡大した感染症のみならず、度重なる自然災害、緊迫したウクライナ情勢など、予測のつかない状況の中、日々穏やかに過ごすことのありがたさを実感せずにはいられません。

さて、今回の明善大同窓会は、3年ぶりに従来の会食形式での開催といたします。皆様におかれましては、日常が戻りつつある中、お忙しくお過ごしのことと存じますが、ぜひ、久留米へお越しいただき、「あの頃」に戻り、友との語らいを楽しんでいただければと切に願っております。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

3年ぶりの総会を対面開催

2022年7月9日(土)第36回関東支部総会を3年ぶりに対面開催した。コロナ禍で2020年は中止、2021年はオンライン開催、幹事会で議論の末、再会期待に応えるべく感染対策を施し、第一ホテル東京シフオードで開催、同窓生約100名が集った。



懇親会模様

総会では山口校長、空閑同窓会副会長、田中久留米市東京事務所長をお招きし母校や同窓会本部の近況を語ってもらった。総会後半はゲスト一人目ミュージカル俳優として活躍する平山透さん(H17卒)が教員から俳優への道のり、そして熱唱が披露された。

懇親会では、別府元会長(41卒)の乾杯で黙食タイムがスタートした。ゲスト二人目昨年千葉県木更津に三代目沖食堂を開店した田中正光さん(H2卒)の久留米ラーメンにかける熱意と苦労が紹介された。歓談タイムではコロナ禍での近況、また同郷話題を肴に3年分の話で盛り上がった。若手同窓生の参加拡大、現役大学生10名が参加し積極的な自己PRに先輩



熱唱する平山さん

方からも歓迎された。また平山さんはじめ30代同窓生は山口校長の教え子20年ぶりの再会で近況語り合った。大同窓会実行委員の加藤副校長(61卒)も急遽駆けつけ熱心な参加勧誘もなされた。締め括りは土肥副会長(31卒)による恒例の白旗の歌、長岡さん(42卒)の五本締めで終えた。対面での筑後弁での懇親会は最高であった。

大同窓会の幹事応援団

昭和61年卒 尋木浩司

昭和61年卒業生として関東支部同窓会の幹事を担当したのが平成25年であり、その頃、次の我々の大仕事は、地元久留米で開催される大同窓会であることは十分に心していたが、遂に新型コロナウイルスの影響でやや遅れたものの元号も改まった令和4年10月15日、明善大同窓会の開催が実現した。

地元在住の同期メンバーで実行委員会が組織され、地元を離れた我々は、全国の大勢の昭和61卒のメンバーが参加しているラインでの実行委員会の報告を見守る程度しかできなかった。新型コロナウイルス対策で飲食無しのホール(久留米シティプラザ)開催という前代未聞の企画がうまく行くのか大変心配していたものの、全体のプログラム企画から当日のスタッフの配置、当日の進行も含め大きなトラブルもなく恙なく進行、終了することができ、安堵の気持ちでいっぱいであるとともに



幹事団勢ぞろい

見事に仕事をやり遂げた実行委員会のメンバーには深く敬意を表する次第である。絆の承継を掲げた我々の魂は次年度に無事に承継できたのではないかと思う。



応援団集結

私自身は、開催約1か月前である9月7日に実行委員の一人である榎尾神二君からの応援団参加の召集令により、応援団に参加することになった。大同窓会当日は、応援団の準備と実演のみにしか関わらず大同窓会の様子を全く見られなかったものの、「チーム加藤(仮)」（注釈：白組応援団長で現明善副校長である加藤茂文君の「加藤」）の一員として太鼓を叩かせてもらい、37年の時を超えて熱い仲間と至福の時間を共有できて魂が熱く高揚した。巻頭言から続く白旗の歌での会場の一体感には本当に最高であった。

大同窓会後は、久留米市内の居酒屋で二次会、三次会と飲み会が続き更なる懇親を深め、家に帰った時は日付も変わってしまった。高校生当時は僅か3年間しか同じ時間を過ごしておらず、言葉も十分に交わしていなかった仲間とも今回の大同窓会を通じて深い絆を結べたことは本当に嬉しいし、また皆と再会できる日を楽しみにしている。

修学旅行で交流会開催

昭和51年卒 内田直人

昨年末に明善2年生280名は東北・東京への修学旅行に出かけた。最終日12月3日(土)の夜、浦安市舞浜のホテルにて生徒たちと同窓生先輩方との交流会が開催された。

支部学友会の伊東会長(55年卒)の声かけで先

輩方を募り大学生から50代の先輩方18名が参集し、夕食後のホテル会場でグループ分けされた生徒たちが先輩方が各自経験した進学、就職、社会人生活での苦労話や生徒へのアドバイスを熱心に語った。1時間の対話では生徒たちが身を乗り出して聞いている姿や熱心に質問する光景が見られた。



交流会模様



参加した先輩方

翌日はお楽しみの東京デイズニールンド観光を控えており、気もそぞろ状態も想定したが、明善生の真面目さ、熱い想いを実感、先輩の大学、社会人経験談を熱心に聞き、進学や就職に対する質問がなされた。先輩方も生徒たちには福岡や九州での進学や就職に固執することなく世界に羽ばたき挑戦することを期待し、学生へ話しかけた甲斐があったようだ。

帰校後、全員から感想文が寄せられ、東京での生活の不安が解消できた、関東の大学も希望校に加える、などの感想があった。さらには夢を持ち、それを実現する情熱も持ち続けることを教えられたとか有意義な対話会であった。久留米にいても先輩方との交流も少なく、体験話が聞けないため貴重な経験ができたとのこと、今後も機会あれば関東支部としても協力し継続したい。

関東勤務が長くて

昭和41年卒 佐々木芳文

院生の時、大学の図書館で読んだ「東名高速道路の建設誌」に感銘し、道路公団への就職を考えるようになった。入社時は、名神・東名高速道路の建設は完了し新規五道(東北縦貫・関越・常磐・中国・九州縦貫道路)の建設が始まっていた。最初の勤務地が東京であったことが今も関東地方に住むことになった。昭和40年代・50年代は、自動車の騒音・排出ガス・震動等の公害による道路建設反対運動が各地で展開されていた。地方自治体も住民に同調し一緒になって建設反対運動が起きていた。急激な自動車の増加により、行政の対策が手遅れになっていた。道路技術者も土木職が多く毎日が勉強であった。音響研究所・ガス拡散解析研究者等の指導を得て、拡散解析手法等の環境対策のマニュアルを作成した。

昭和50年代になると具体的な対策案が提案できた。しかしながら首都圏では、所有権等の権利取得が複雑・困難なため大深度(地下50m以深)でトンネルで通過するようにもなった。中央環状線・外かく環状線等。

更に昭和40年・50年代に時間を要したのが文化財保護対策であった。既に文化財保護法は出来ていたが工事着手すると新たな問題が発生した。担当した京葉道路の荒屋敷貝塚は当初記録保存であったが、文化庁との協議で現状保存となった。沿道住民・文化庁・道路公団との協議の結果当初の堀割構造から、貝塚直下をトンネルで通過する構造となった。併設する国道16号も同時施工するためパイプルーフ工法を補助工法とした4連メガネトンネルとなった。工事発注時細部検討が出来なかったこと、国道51号バイパスと交差する箇所にインターチェンジを設置したこと等のため、変更作業が多く竣工までの4年間担当することになった。新たな用地取得は難しく用地内での設計・施工のためコンパクトなインターチェンジと

なった。今ではランプ長が短いため交通渋滞箇所となつていて。ネクスコ東日本は改築検討に着手したと聞いている。早く改築されることを願っている。この実績が買われてか東京周辺の道路建設が多くなった。

入社16年目に広島勤務となったが、その時には子供の故郷は船橋、横浜であり、地方勤務の時は当然單身赴任となった。住宅公団社員の意見を聞いて、千葉ニュータウンに住宅を構えることになった。住んで35年になる。終の棲家になるかは未定であるが東京一極集中に加担していることは確かである。健全なる国土の均衡ある発展とはどのような国土形成なのだろう。

自由業の世界を愉しむ

昭和43年卒 本田陽一

久留米を離れて50数年余、明治通りや一番街などの通りを歩いても知らない人ばかりですが、折り訪れたときは今でもあちこちと歩きたくなります。明善では天文部と速記同好会に所属していました。天文は星が大好きな真面目な人たちの集まりで、速記は仲良く遊ぶことが目的のような会で、バドミントンやカードゲームに興じていました。

昔々に時折り書いていた日記を紐解くと、20歳の頃に「弁護士を目指して」と将来の夢を書いていました。紆余曲折はありましたが、20年後にこの夢を実現して弁護士となり、今は千葉県市川市で長男の弁護士と共同で「法律事務所羅針盤」という事務所を開いています。中央大学法学部を卒業して裁判官となり、初任の地が千葉地方裁判所、以来千葉県に縁ができ、今も住んでいます。裁判官12年、弁護士33年の併せて45年間法曹として生活して来ましたので、その中で感じたことなどを綴ってみようと思います。弁護士は自由業の代表という感じがしますが、職業的には裁判官の方がより自由業です。裁判官の生活の窮屈さは否定できず、自己制御ができてこそその職業であること

は確かですし、概ね3年毎の転勤もあります。他方で、裁判官には職務上の上司がいませんし、勤務時間という概念もありません。私の場合も裁判官として登庁した初日から幾つもの決定書の審査と捺印を求められました。捺印をすれば、そのままその案件に対する国の意思決定となるのですから、捺印に怖さを覚えた記憶があります。裁判官はその職責の大きさから当初5年間は訴訟事件や非訟事件を単独で取り扱うことはできませんが、それ以外の事件の決定は単独で行うことができ、実際相当な量の事件処理を日々担当しています。

一人の意思決定がそのまま役所の意思決定になる仕組みを独任制官庁と言いますが、裁判官はその最たるものです。「裁判官は、良心に従って独立して職権を行い、憲法及び法律にのみ拘束される」と裁判官の独立を憲法が保障し、実際にもこの独立の保障は現場でも徹底されています。民間会社や官庁で、上司の意向や稟議書作成に苦勞してきた方ほど、裁判官が自由業であることをより理解できるのではないのでしょうか。明善にいた頃から「自由」を旗印の1つとしていた私には、生活面での多少の窮屈さはあっても職業人としての自由を保障された裁判官というのは魅力的であり、今でも好きな職業です。それでは何故弁護士に転職したかと思われるでしょうが、私の元々の夢は弁護士になることであり、一度きりの人生だからこそ、異なる職業も経験したかったゆえです。法曹という職は、そもそも社会の病理現象や人間の悩み事を取り扱うことを本務としていて、ストレスの溜まる職業ですが、全てを自己研鑽と自己制御で行う裁判官のストレスは弁護士の比ではありません。そうした大きな責任を負っている裁判官を職員の方々は大事にしてくれます。私にとって裁判所は居心地が良すぎるくらいで、定年までの先々も見通せる安定した職業でしたが、人生の冒険を目指すためには飛び出すべきという選択をしました。弁護士になると一変して、生活の自由度は劇的に増し、他方で事件受任ができな

ければ収入もなしで、数ヶ月先の見通しも立たない有様でしたが、変化に富んだ人生となりました。ちなみに弁護士としての私の専門は長らく企業倒産事件に相続事件であり、明善で学んでいた頃から企業や経済の仕組みに興味があった者としては、興味関心を惹き付けられることを仕事としていることになり、有り難く思っています。今回の関東支部会報へ私の人生の幾ばくかを語る機会を与えられたことに感謝して、筆を置きます。

「どういうわけかダイビング?」

昭和44年卒 高島隆明

還暦を過ぎサラリーマン生活も終盤となりこれからどのように生きていこうかと頭の片隅で考え始めていた時、家族での沖縄本島旅行のことです。家族4人、美ら海水族館で巨大なジンベイザメを見た後、長男が「とうさん、ジンベイと泳いでみない?」との唐突な事を言うではありませんか。

「真栄田岬沖にジンベイの生簀があり誰でも海の中でジンベイと泳げる」と??

そこで次男と私は、半信半疑で長男の案内で翌日ダイビングを体験する事に。

スキューバダイビングの初歩レクチャーを砂浜で受けた後、小舟で沖のジンベイザメのいる生簀へ。船の梯子から海中へダイビング。海中の生簀の網につかまっていると海の底から体長5mのジンベイザメが私と次男の手の届く距離に来てくれました。ジンベイザメの大きさに感動していると、えええ。なんと長男は別のジンベイザメの側を泳いでいるではありませんか!

陸に戻った長男が「ライセンスをとればジンベイザメと自由に潜れるよ」と。

それではと私と次男はダイビングのライセンスに挑戦することに。

ところが年を取っているとなかなかライセンスを取らせてくれるショップが少なく、偶然みつけた石垣市の「海の教室」が当時65歳の私にOKを

出してくれ、老体に鞭打ちながらようやくダイバー入門のオープンウォーター(OW)というPADIのライセンスを取得。(後にわかったことですが、このショップの社長は久留米出身。彼曰く、なんと彼の姉上は明善の後輩と。ほんと世間は狭い!)

魅入られて毎年ハシマシーヤークやバラクーダなどの大型の魚をベテランダイバーさん達と追いかけています。



海底鍾乳洞で300本祝

さー、いざFUNDIVE開始。海の中の静寂さとカラフルな熱帯魚を楽しんでいて半年経ったある日、長男が「こんど一緒にマンタに会いに行かない。」と。

続けて「でもライセンスはもう一つ上のライセンスが必要で」と早くランクアップしろという謎かけ。結局、翌年一つ上のアドバンス・オープンウォーター(AOW)を取得することに。それからマンタ追っかけて竹富、小浜、西表など八重山の島々でダイビング。そして、経験本数(使用するタンク)が50本を超えてくると、器材の取り扱いの慣れいつの間にか宮古島、多良間島、久米島などの沖縄の離島を転々とするなど、すっかりダイビングの虜となっていました。その後

は石垣で知り合った若いダイバー達と2018年にはパラオ、翌19年にはタイ・シミラン諸島、翌20年にはモルジブと海外でのハードなクルーズダイビングに参加。「己の年も考えずにほどほどにしとかんね!」と言われるそうですがお陰様で、21年6月に与那国島で200本、昨年7月に沖縄本島

北端辺戸岬の海底鍾乳洞で300本に到達することが出来ました。最近では日本最西端の与那国島のドリフトダイビングに



与那国島で200本祝

出会いは、仕事を引退しこのままだ老いていくと思っていた私に「チャレンジ精神」「精神的な若さと体力」「新たな生きがい」をもたらせてくれています。これからも体力の続く限りダイビングを続け、孫娘と一緒に潜る夢と世界中の様々なダイビングスポットに潜る夢をかなえたいと思います。

次に私が実感しているダイビングの効能について述べます。

第1には、「精神的なやすらぎ」です。

ダイビングでお会いする方々は悩みを抱えている方か「今がいちばん幸せ」という方か両極端な方が多いのですが、今まで見たこともない世界に浸ることで精神的な安らぎを感じられます。

第2には「肺機能の衰えの防止」

高気圧下の水中での適度な運動は肺機能や内臓機能の活性化が見込まれる様です。その証拠にダイビングで一緒に潜った80歳を過ぎた女性は今でも水の中では若者よりお上手です。笑

第3は「睡眠とダイエット効果」

ダイビングで1DIVE 480kcal 2DIVEで約900kcal消費します。運動不足で体重が気になる方には太りすぎ防止にはもってこいのスポーツです。またダイビングの後は心地よい疲労感から夜9時には爆睡することが多いです。睡眠が浅い方、お勧めですよ。

私は、96歳になる母から「あんたもう年やけん、若者のごつはいかんとばい。ほどほどにしとかんと死ぬばい!」と言われます。親に心配を

ける親不孝者かもしれませんが、「親に少し心配かけるのも親孝行」と勝手な理屈でせつせとダイビングをやっております。笑

最後に、「ダイビングは知識と準備をしっかりとやれば決して危険なスポーツではありません！」これを読んでいただいている先輩方や後輩諸君へ。ダイビングにご興味がありましたら是非小生までご連絡下さい。明善の校是「克己・盡力・楽天」人生最後は楽しく悔いなく過ごしましう。

大同窓会へ2400キロのドライブ参加

昭和45年卒 山口 務

2022年10月15日開催の大同窓会とプチ同期会に向けて、古賀(尚之) さんの厚木自宅を豊島(健次) さんと3人でプリウスアルファに乗って出発したのは10月13日の14時でした。天候は「天気晴朗しかも微風」で絶好のドライブ日和です。

早速、すぐそばの圏央厚木ICで高速道路に乗り往復2400kmの長旅がスタートしました。今回のミッションは①大同窓会への参加、②3名のプチ同期会への参加、③久留米B級グルメの飲食、④名産品のお土産購入、その他です。

久留米への移動は問題無く順調に進み、九州自動車道鳥栖ICで14日3時に高速道路を降りました。久留米に着いたらまずは丸星ラーメンセンターのラーメンと決めていたのですが(昔と同じ24時間営業と考

えていました。)

営業は21時に終了で、食べる事ができませんでした。

そのまま市内に入り、久留米でセブインレブンを経営している坂井くんのお店の駐車場を借りて仮眠し、6



沖食堂ラーメン

時に久留米での宿泊予定のラグビー部池田くんの自宅に到着しました。

ここまで古賀くん一人で運転し、休憩は新名神高速道路宝塚北SAだけでした。JALのB747の豊島元機長がスタンバイしていたのに宝の持ち腐れでした。

翌日は休養日で同期生が経営する津福のうどん屋「たけ屋」で肉ごぼう天うどんを食しました。

10月15日は大同窓会とプチ同期会の二大イベントです。大同窓会は同窓会関東支部事務局長の古賀くんにお越し、豊島くん、山口はプチ同期会の世話役の岸田くん、池田くんとラーメン六ツ門「潘陽軒」で待ち合わせ、昔話に花を咲かせていました。そして、17時には同期会会場池田川沿いのラウンジ「みずす」に向かいました。

同期会に集まったのは女性3名を含む18名(うち関東3名)、メンバーは在校時運動部、テニス同好会ジョッカーズ、シャインズメンバー及びサポーターです。話が弾む中全員から近況報告が有りましたが、在校時に運動部では無い人の方が元気な様子です。終了間際にはサッカー部の日野先輩にお寄り頂き、最後まで盛り上がり

ました。帰りは少し小腹が空いたので小頭町公園の屋台ちゃんぽん「武ちゃん」に寄りまし

た。16日は日本三大火祭りの鬼火で有名な



プチ同窓会

大善寺「玉垂宮」から近い「うなぎの富松」で蒸籠蒸しを食べた後、お土産「道の駅うきはの柿」と松木漬物食品(瀬高町)の「高菜漬け」を積込み帰宅への準備は完了しました。17日の出発起点は沖食堂。ラーメンを食べた後13時30分にスタートし九州自動車道久留米ICを14時に入りました。帰りの往路と殆ど同じ道を通り途中事故、工事渋滞はあったものの無事に10月18日5時に出発地点厚木の古賀家に到着しました。

「福岡的ランチ」のすすめ

昭和56年卒 秋永佳世



福岡旬彩小箱

「麹町なだ万福岡別邸」が1月に開業したということと同級生とランチに行ってみました。ここは以前「ふくおか会館」があった所で、東京でレッスンを受ける時や受験の際にホテルにお世話になった個人的に思い出のある場所でした。当時地下鉄に乗り慣れておらず地上出口がわからなくて泣きそうになりながらひたすら歩いたことを覚えてい

ます。2015年に閉館し、現在は「住友不動産ふくおか半蔵門ビル」として2階に福岡県東京事務所が入っています。お店の壁には博多織や久留米餅のタペストリーが飾られ、木の温かみの感じられるすてきな作りでした。オープン記念ということで『福岡県料理フェア』をやっており随所に福岡県の名産品が使われていました。個人的には玄界灘産アオリイカ

や博多地鶏のかしわ飯、あまおうのブラマンジェ等たいへん美味しかったです。他にもごぼう天うどんなどのメニューもありました。コロナも収まりつつある今年、7月22日の関東支部同窓会に向けての話題作りも兼ねて皆さま美味しいものを食べにお出かけになりませんか。そしてぜひおすすめのお店をご紹介します!

「木更津三代目沖食堂!行って後悔?」

昭和53年卒 青木淳子

令和5年2月4日快晴、最高気温11度、53年卒業生のゴルフ仲間7人で日本長江ゴルフクラブでミニコンペでした。この日のもう一つのお楽しみが、木更津沖食堂に行く事!お風呂も早々に15時4分に到着。明善高生と告げると、早速嬉しいピースご飯のサービス。(高橋さん、ありがとう!)各自チャーシュー麺と、この日の優勝者正木君のおごりで、大盛焼きめしも注文。こつてりなのさっぱり豚骨スープ味久留米ラーメンと、だしが効いた、子供の頃に食べた懐かし味のチャーハンを堪能しました。ここ木更津店は、山本君は2週間ぶり、村岡君は3年ぶり。沖食堂の味は高校卒業以来というのが、大村君、弥永君。そして私は初沖食堂。こんなに美味しいと知ってたら、お腹が空いた男子専門の店だと思っていた沖食堂に、高校時代行かなかったことを後悔しました。アクアラインは混むけど、皆さん、ゴルフの帰りに、いえ、木更津三代目沖食堂目指してぜひ、行ってみて下さい。こんどは店主の田中さんにもお会いしたいです。



三代目沖食堂にて

65歳特集「昭和51年卒」

実質的な定年年代の皆さんの特集を毎年お届けしています

◆私はこうして二刀流になりました

昭和51年卒 岡本善勝

60歳での定年退職から5年が経ちこれまでの日々を振り返ってみると、その時は納得できなかった事が実は人生の幅を広げ豊かにしてくれたと、今になって気付く事がある。私の場合は30数年間携わった宣伝広告の世界から、いきなり環境対応の部門への異動で、54歳にして全く未経験の領域へ放り込まれた。でも結果的にはこのことが私を広告クリエイティブと環境の両方を語れる二刀流にしてくれた。

明善高校時代、美大に進学する勇氣も技量もないが、なんとなくクリエイティブに関わりたという思いを持っていた私に、美術の柿原先生から「九州芸工大という大学（現在の九州大学芸術工学部）があるよ。」とアドバイスをいただき、そこから私の広告制作との付き合いが始まる。芸工大・画像設計学科に進学し、運よく化粧品大手・S社宣伝部にグラフィック・デザイナーとして入社した。1年目はのんびり甘やかされていたが、2年目にシーズンキャンペーン室に配属された途端、今では絶対許されないような徹夜の連続が続いた。いわゆる春キャン、夏キャンである。5年目からはパリ駐在。フランス人アーティストの作るビジュアルをもとに世界中の化粧品売り場を彩るのが業務だった。1989年帰国、CM担当からプロデューサー、のち制作プロデューサー室長。過酷な仕事だったがこれまでの経験を活かして乗り切っていく毎日には張り合いがあった。

しかし激変が訪れる。2012年ほとんど知識

のない環境領域の

しかも責任者に異動。広告制作には

どこか利根的な気

分があるが環境対

応は正反対、子供

や孫たちにどう未



フランス人アーティスト:
セルジュ・ルタンス氏(1986年)

来を残すかである。とりあえず手当たり次第に外

部セミナーを受講し、そんな中で出会ったのが「環境に負荷をかけずに心豊かに暮らすライフスタイル」を研究されている石田秀輝教授（東北大学大学院）だった。一目惚れに近かったと思う。社会人が受けられる修士課程があると知りなんとか入学、たくさんの先生や先輩、仲間と出会えた事は私の宝になっている。

その頃S社ではシャンプー・ツバキに五島列島の椿オイルを使用していて、持続可能な調達のために北部・新上五島町で椿の植樹を毎年行っていた。町長と懇意になり聞けば翌年NHKのど自慢を呼ぶことが夢だという。NHK幹部の明善同級生、井上くんに相談すると、難しいが働きかけてみよう言ってくれて、なんとこれが実現したのである。五島の会場で一緒に見たのど自慢収録、島全体の盛り上がりは忘れる事ができない。そんなこんなで今は広告制作と持続可能性をつなぐ二刀流のコンサルティングをやらせてもらっている。五島列島、椿の植林地・鯨見山



◆65歳3度目の退職を迎えて

昭和51年卒 宮原利行

昨年、65歳となり、今年の3月で3度目の退職となりました。

15年ほど前までは、仕事中心で日々の対応に追われた生活をおくってきましたが、50歳を過ぎ、先が見えたあたりから、気持ちに余裕ができたのか、若い頃を振り返るようになりました。特に明善時代の仲間とは、関東同窓会の幹事を務めるころから連絡を取り合うようになり、今に至っています。さらに、我々の年次が久留米の大同窓会の幹事と

なった2011年は、東北の震災と、私の1度目の退職が重なり、忘れられない年になりました。

その後も、関東同窓会や、同期の集まりには殆ど出席し、若い頃を懐かしむ仲間との語らいを楽しんできました。

そういえば数年前でしたか、校舎が新しくなるという話があり、卒業生は事務所に申し込めば旧校舎内を含めて見学できるということで、帰省の折にカメラを持って行った覚えがあります。夏の暑い日、篠山城から明善、菊竹金文堂跡、池町川を通って井筒屋跡だったか。明善の中では、中校舎と言えいいのか、一番古い校舎の手すりの部分が石でできた階段や東側の上にある大時計の跡。高校の時は壊れた時計の文字盤がなかったかな？とか、印象深いものがありました。ただ、その時残念に思ったのは、もっと早くに来ておけばよかったということ。既に、木造の図書館、地下の食堂、中庭もなくなり、隣の朝日屋もなかった。残念、記録として残したかった。ただ、最近思うのは、受験勉強で利用した図書館の読書室の日差し、一限目の休み時間に焼き飯を食った地下の食堂の匂い、昼休みにボーっとしていた中庭の景色、イギリスパンらしくないイギリスパンのコーンフレークのトッピングなど、記憶としては今でも十分残っています。学び舎や学んだ環境のように、時代時代を反映するものは、記録では表せないものも含め、記憶としてはしっかりと残っており、語らいの場での酒の肴として十分活用できるものです。

これからも、老いてはいきますが、人と人、特に将来の期待と不安を持った時期を過ごした同窓とのつながりをこれからも大切にし、コミュニケーションを続けていければと思っています。

◆光陰矢の如し、少年老い易く学成り難し

昭和51年卒 高吉晋吾

「光陰矢の如し、少年老い易く学成り難し」コロナの流行前に聴きに行った井上陽水のデビュー50周年ツアーの副題です。自分も今年は中学卒業、高校入学から50年になります。最近はいろいろなことを思い出せなくなって困っているのですが、高校では、三角先生から「メッキはすぐはげ

る、地金を作れ」、高山先生から「同じ問題にいつもお初にお目にかかりますではいかんぞ」など指導を受けたことはしっかりと覚えています。

高校を卒業して、大学では土木工学を専攻し、水産庁で主に漁港や漁場の整備に関する仕事につきました。高校までは身近に筑後川や宝満川はありましたが、海は海水浴や潮干狩りに行く程度の付き合いでした。縁あって以来40年以上上海の仕事をしています。一番の出来事は2011年3月11日の東日本大震災の発生でした。東北地方の太平洋沿岸を中心に多くの漁港や漁村が壊滅的な被害を受けました。震災後まもなく、東北新幹線が不通だったので、羽田から青森空港に飛びそこから自衛隊のバスで岩手県釜石市、大槌町に入りました。一面のがれきと化した街並みを見て呆然としたことを思い出します。それから何度も被災地に足を運びました。ハードの復旧はほぼ終了しましたが、人口減少、海の環境変化など課題を抱えています。ひとつの区切りとして、おとしの暮れに、震災から10年を振り返るシンポジウムを現在の職場で開催しましたが、これからも関わっていきたいと思います。

さて、日本人が食べる魚介類の量が大きく減っているのをご存じでしょうか。国民一人当りの消費量は20年前に比べ4割も減っています。世界では水産物消費が大きく伸びているのと対照的な状況です。原因はいろいろありますが、魚が健康に良いことは周知のとおりです（加齢による認知機能の維持、骨が丈夫になる、生活習慣病の予防など）。高齢者の仲間入りをした私たちだけでなく若い世代にも少しでも多くの魚を食べていただきたいと思えます。それが東北地方をはじめ津々浦々で頑張る漁師さんたちを応援することにもつながります。

◆65才になって、そして楽しみな同窓会

昭和51年卒 高野由美

結婚を機に、札幌で暮らすようになってもうすぐ40年になります。子育てや家事などでアツという間に過ぎた気がしますが、数年前から少しずつ身体の衰えを感じるようになってきました。65才は、「ついに高齢者か…」と誕生日が近づくにつれ

抵抗感もあったりしたのですが、不思議と身体も心ものんびりと穏やかになっていき、「これが老いるということなのかな。」と納得してしまいました。札幌で暮らしはじめた頃は気候風土など多少戸惑うところもありましたが、日常の忙しさで日々過ごしてきました。最近自分で驚いたのが、今冬朝起きたら真つ白な雪で辺りが覆われていて、毎年当たり前にある風景なのに、なぜかうれしくなったことです。すっかり道産子になっていることに気がつきました。40年も経てば当たり前前かもしれないが…。

ところで、我が家には13才になる「チロ」という豆柴犬がいます。今は、チロを一日でも長く、平均寿命を超えて18才まで生きてくれるように、そればかりを願って暮らしています。数年前には、何度か車に乗って夫とチロと3人で静岡などに行きました。フェリーにも乗って楽しい時間を過ごしました。

最近、チロに「少し老けたかな」というところも見受けられ、長い時間寝ていることも多くなり、もう長距離で出かけるのは難しいかもしれません。過去にも犬を飼っていましたが、最新のお世話があまりできなくて悔いも残ったりしました。でも今は、私自身、年なりのおかげか穏やかに静かに見送れる気がしています。

日頃、私は高校時代のことをよく思い出すことが多くあります。歴史のあるキリッとした空気が朗らかな笑顔が学校にはあったと思います。その中で過ごせたことが、後々の自分にとっても力となりました。65才となり、これからまた健やかに過ごしていけるように、心身を整え、身の周りもスッキリして暮らしていきたいです。そのためにも、この同窓会が末永く続いて、また出席できることを願って楽しみにしております。

◆山が好き

昭和51年卒 三浦好子

思い立って横浜の登山サークルに入会したのは5年前のことだった。ここでは体力別に4段階のランクがあり、見合った山行に参加するという合理的な会運営をしていた。体力チェックの場合は丹

沢の塔ノ岳である。登山口から山頂まで1200メートルの高低差のある山である。これは富士山5合目から山頂までとほぼ同じ高低差ということになる。初めて登った時、上りの階段は果てしなくて、天国まで続くのかと思ったほどだった。1年に1度、体力チェックを受けてきた。私は、岩や沢、テント泊をしたいと思わないので1番上のランクを目指す必要はないが、2番目のランクを維持しておきたいと思った。10kgのリュックを背負い3時間で上り、2時間20分で下ることが出来ればクリアである。

いつもの生活のままでは無理なのは分かっていた。そこで1ヶ月前から準備を始めた。毎日、1〜2時間ほど10kgのリュックを背負うことにしたのだ。最初の頃は、重くて家事の途中で座り込んだりしていた。ところが、しばらくすると10kgを背負っていても少し楽になってきた。そうして1ヶ月が過ぎ、体力チェックで山に行った。無事にとはいかなかった。上りで皆より5分遅れてしまったのだ。範囲内だから、2番目のランク維持にはなったけど。こうしてチェックが済んだ今、目の届く所に10kgリュックはあるのに置いたままになっている。

あのまま10kg筋トレを続けたら、日本の山々を楽しく登ることが出来るのに。

どうして私は切羽詰まらないとやらないのだろう。学生時代のテスト前、何日か、最短一夜漬け勉強を思い出す。何十年経っても変わっていないところがあるみたい。まあ、いいか。

65歳にして1ヶ月間毎日10kg筋トレを続けたことを誉めてあげよう。でもね。たまには10kg背負ってみようよ。リュックが泣いてるよ。ホントはもう1度、槍ヶ岳に登りたいんだよ。



2022年潤沢カールにて

関東支部ゴルフ大会3年ぶりに開催

昭和51年卒 友池哲雄

新型コロナウイルス感染拡大で中断していた関東支部ゴルフ大会が再開された。第23回大会は昨年5月21日(土)相模湖カントリークラブにおいて12名3組で開催された。優勝は、三浦好子さん(S51)準優勝は古賀啓子さん(S41)の女性陣の活躍、ワンツーフイニッシュとなった。

第24回大会は10月29日(土)箱根くらかけゴルフ場において開催された。

当日は東名の事故渋滞でスタート前直前の到着となった瀬戸さんを玄関前で一同お迎えした後、富士山を背景に集合写真ではじまり快晴微風の絶好コンディションの中10名3組で富士山、相模湾、箱根湖を眺めながらのプレイで盛り上がった。優勝は、瀬戸渡さん(S44)準優勝は内田直人さん(S51)でした。

これからも年2回の開催を予定、次回は5月19日(金)に四街道ゴルフ倶楽部で開催予定、若い方々も奮って参加されることを期待します。

第23回成績

順位	氏名 (卒年)	TOTAL	HDCP	NET
1	三浦 好子 (S51)	116	40	76
2	古賀 啓子 (S41)	94	17	77
3	御船 次雄 (S43)	96	18	78
4	原 寛 (S55)	96	17	79
5	原口 勝弘 (S55)	91	10	81
6	持松 明弘 (S55)	99	18	81
7	本田 匡史 (S55)	90	7	83
8	山口 光夫 (S43)	113	30	83
9	友池 哲雄 (S51)	106	19	87
10	瀬戸 渡 (S44)	107	19	88
11	古賀 尚之 (S45)	131	36	95
12	江口 和篠 (S44)	125	14	111

第24回成績

順位	氏名 (卒年)	TOTAL	HDCP	NET
1	瀬戸 渡 (S44)	88	21	67
2	内田 直人 (S51)	98	24	74
3	古賀 啓子 (S41)	89	14	75
4	山口 光夫 (S43)	108	31	77
5	古賀 尚之 (S45)	113	36	77
6	嶋田 哲 (S48)	92	12	80
7	御船 次雄 (S43)	96	16	80
8	山下 政晴 (S43)	104	24	80
9	友池 哲雄 (S51)	104	21	83
10	三浦 好子 (S51)	125	28	97



箱根くらかけゴルフ場にて

部室の想い出・・・
鮎川君―新聞部&西村君―速記同好会

昭和42年卒 西依章郎

鮎川誠君が逝った。余にも若く、残念ではあるが、燃焼し尽くした、濃密な一生だったのかも知れない。

鮎川君は新聞部だった。部室でエレキを弾いても許される自由な雰囲気だった。その新聞部の部長が、何と大作家の青木蓬生さんだった。のちの有名人お二人が1年間は同じ部室にいらっしやった訳だ。好対照なお二人なので、何となく微笑んでしまう。

その隣の部屋が私が所属した速記同好会であつた。ただ、私が会長だったくらいだから、速記とは名ばかりで、良く言えば青春を語り合つたということになるが、雑談と遊びの同好会で、少なくとも我々の学年は殆ど速記を書けない。その中で、活動日誌というノートを作り、毎日長文を書きまくっていたのが西村克己君で、長文なのに、つい引き込まれてしまう名文で、みんな彼こそ作家になると思つていた。その彼も昨年8月に逝つてしまつた。電話連絡を受けて泣き出した人も居た。本当に残念だ。

前述の2つの部室を挟んでいたのは文芸部とハンドボール部。ハンドボール部は真面目なクラブだったが、男だけの部室だったので、速記との壁に小さい穴をあけた。すぐにばれて期待は実現しなかつた。今なら大問題になるかも知れないが、当時は可愛い悪戯に過ぎなかつた。文芸部の隣に空き地があつて、何故かそこにバドミントンのネットが張つてあつて、速記のメンバーが毎日そこでプレーに興じているので、文芸部の真面目な人達が呆れていた。この4つの部室から、少なくとも2組のカップルが生まれている。勿論実らなかつた恋は数限りなく存在する。

さて、速記の話に戻ると、在学中の活動は惨憺たるものであつたが、卒業してからは何故か

活発に動き出し、特に50歳の時に東京の福岡会館で会食(20名)、翌日箱根で合宿(15名)という行事をやつてからはノリノリで、毎年、日本のどこかで、それも夫婦で集まることと相成り、何と20年も20〜30名が集まるイベントとして続いてしまつた。(こういうイベントには大体先輩は呼ばずに、自分達が大将になるのが通例で、この会も2年後輩までの3年間の在籍者で構成された。)

「西依が永久幹事ね」と勝手に決められて、10年経過した時に、「毎年集まつても懐かしゅうなかる、3年に1回にせんね」と提案したが、女性陣に「私たち、こういう名目無しには家を空けられん」とよ、来年は介護で来られんかも知れんとよ、絶対毎年やつて!」と一蹴された。20年も続いた第一功労者は永松寿一君で、東急ハーベストの京都・蓼科・箱根・那須・鬼怒川・有馬・白浜等々、良い場所の部屋を毎年15室も確保してくれた。第二は久留米組がみんな毎年参加してくれたこと。第三は後輩の皆さんがどんどん加わってくれたこと。

コロナもあつて、その後集まれなかつたが、西村君の墓参りで10名が顔をそろえた。西村君が天国からみんなを集めてくれたのだと、感謝!

鮎川誠さんを偲んで

昭和42年卒

・鮎川君とは小学校から中高とずっと一緒にいた。私にとってはロックスターというより、幼なじみの印象の方が強いです。

思い出と共に静かに送りしたいと思います。

(高橋)

・鮎川さんの思い出は、ただ一つ、旧体育館でのバンド演奏(たぶん文化祭かな?)。当時、私もギターを始めたばかりでレベルが違ふと衝撃を受けました。彼がプロになって活躍しているのを知つたのはずいぶん後になってからです。

久留米でのコンサート3回ほど聞きに行きま

した。同い年でこのようなパワードから出るのだろうと感心していました。(樋口静子) 彼はロック人生の全てを掲げ走り抜けた男でした。私たちと同年令で癌と闘いながらステージに上がり続けた事は全く凄い体力と情熱の男でしたね。ロック界で頂点に立ち、家庭も恵まれ良い人生だったでしょう。(阪本)

・葬儀に参列しました。サングラスをかけた穏やかな彼のお顔にお別れを告げました。会場を後にすると近くの公園に遅れて始まる一般参列にきたファンが大勢、寒風の中に並んで待つていました。いまさながら鮎川君の偉大さが分かつた思いでした。(岩政俊明)

・TBSの追悼番組(解放区)を見て、一途に音楽を極める姿勢、奥様や娘さんたちに尊敬される存在だったこと、感じ入りました。特に娘さんがお父さんのギターを続けて欲しいために、ヴォーカルをやることになったとのくだりはジーンとききました。

朝日新聞に陣内孝則の追悼文、週刊朝日にも追悼記事があり、彼の人となりがよくわかりました。(島津)

・「解放区」鮎川氏の生き様・家族愛をじっくり感じました。

今まで彼は「名を遺した同窓生」としての認識でしたが、彼の人間性をしっかりと受け止めることができたような気がします。

(佐藤康博)

・鮎川誠さんの訃報に接し想いを巡らすと、70年程まえの彼の幼少の時期に遡ります。

小学校1〜2年生のころだったと思いますが、当時私は諏訪野町に住んでおり西国分小学校に通っていました。

その頃マコちゃんも同じ西国分小学校に通っており、ある時学校帰りに仲間と彼の家に遊びに行き当時としては稀であった豪華な山水の庭園付き豪邸に子供心に驚き、興奮しその屋敷中の長い廊下をバタバタと走り回つて遊

び彼のお母さんに「静かにしなさい!」と叱られた記憶があります。(その建物は戦前は陸軍の師団長官舎で戦後市に移管され当時市長官舎として使われており現在は「高牟礼会館」として石橋文化センターの管理下であると後で知りました) マコちゃんの幼いころの逸話にある「門柱の上から落ちて、前歯を全部折つた!」(武田鉄矢との番組で)と語っていたのは多分その頃のことで、その家の立派な御影石の門柱だったかなと懐かしく思い浮かべます。

(柴田勝世)

○関東支部役員	
会長	田内
副会長	土肥
幹事	古賀
代表幹事	友池
事務局	山口
事務局	古賀
副事務局	五十嵐
委員	井手
委員	伊東
学友会	泉
監査役	賀久
顧問	大保
顧問	別府
顧問	瀬戸
顧問	井上
相談役	

(2023年4月1日現在)

編集後記

今回から従来のA3版誌面郵送に加えて、多くの方へはネット配信(PDFファイル)とした。受信後に印刷するのはA4版が大半で文字が小さくなるために誌面を回り小さいB4版にした。読み心地は多少低下したが内容は従来どおり充実している。コロナに負けずに大同窓会・支部総会もリアル開催、対面で再会できた喜びが伝えられた。先輩方の高速道路建設、法曹界で長年勤め充実した仕事の思い出が綴られた。驚きは還暦後に始めたダイビング!! だった。多くの読者が元気をもらつたと想像する。地元食グルメ記事、ぜひ訪れて賞味してはどうでしょうか。65歳特集「実質定年世代我ら同級生から明善時代や仕事の思い出また元気に過ごす近況を掲載した。鮎川誠さんが今年1月に亡くなった。同級生から明善時代の新聞部での様子やマコちゃんのたくさん思い出が語られた。ご冥福をお祈りします。来年はさらに楽しい記事がたくさん掲載できそうです。みなさんからの投稿お待ちします。(NU)